

第82回市民ふれあいトーク 【学生と考える倉敷のまちづくり】

日時 令和元年10月5日 13:30~15:00

場所 川崎医療福祉大学

要約版

《市長》

改めまして皆さんこんにちは。今日は川崎学園におきまして市民ふれあいトークということで、大変楽しみにしてまいりました。以前も一回、確かこの場所だったと思いますけれど、皆さんとお話をさせていただくことができるとてもうれしかったわけですが、この市民ふれあいトーク、もう82回目となります。市議会があるときはやってないんですけど、大体毎月1回ぐらい私がいろいろな場所に出向きまして、皆さんが市のことについて、関心を持っていることについて話を伺いまして、それがすぐ解決とか市の方針になるかどうかは分からないんですけど、私の意向としては、市民の皆さんの関心事が今どこにあるのか、そしてそれを今後市の施策として大きく育てていくためにはどういうふうにすればいいのかということを考えるきっかけにしたいと思っています。大体いつも最初に私の方が10分ぐらいお話をしまして、そして皆さんの方からいろいろな意見をいただいたり質問をいただいたりして進めていこうかなと思いますので、よろしくお願いいたします。

さて、皆さん何年生ですか。1年目の人。(挙手) 2年目の人。(挙手) 3年目の人。(挙手) 4年目の人。(挙手) 5年目の人。(挙手) それ以上の人。(挙手) 各学年まんべんなくいらっしゃいますね。皆さん、この倉敷市の川崎学園を選んで入学してくれたこと、地元の市長として本当にうれしく思っていますし、多分川崎学園さんは学生さんが6,000人ぐらいいらっしゃるかと思いますので、多くの学生さんがいらっしゃるということで、とても市が活気づいているということがあって、大変うれしく思っています。

皆さんが住んでいただいている、また勉強していただいているこの川崎学園さんは、初代の祐宣先生が岡山の方で最初病院をされた時から言いますと、確かあと10何年かぐらいで100年になると思いますけど、この倉敷市松島の地に来ていただいてから、来年には創立50周年を迎える大変歴史のある大学です。そして、全国有数の様々な機能を有している大学であり、地域にとって本当に誇りに思っている大学です。そして学生の皆さんたちが勉強し、またいろいろな活動にも参加してくれていること、私たちがとても願っているところです。

さて、今の倉敷市の大きな現状のことについてお話をしたいと思います。ちなみに全国各地から来ていただいていると伺っていますけど、岡山県内出身の人。(挙手) 10%ぐらいですね。となると後の人は皆県外ということになりますね。それじゃあ、大学に来る前に倉敷に遊びに来たことがある人。(挙手) 少ないけどいらっしゃいますね。

まず倉敷はどういうところかと言いますと、これはちっちゃい地図ですけど、ご存知のように倉敷は、今人口は大体50万人弱ぐらいです。48万5,000人で隣の岡山市さんが大体70万人ぐらい。岡山県内全体が190万人ぐらいですので、岡山県内の大きな都市として岡山市と倉敷市、お隣の広島県では福山市さんや広島市さんなどもありまして、ご存知のようにこの地は産業がとても発展しており、また文化のまちであり、かつ自然も豊かなまちでございます。この倉敷地区では伝統的建造物群保存地区の美観地区の町家古民家がありますが、美観地区に行ったことがある人。(挙手) ほとんどの人がいますね。美観地区は日本全国の中でも大変有名なところで、これだけの地域で江戸時代からの町並みを残

しているのは全国でもなかなかありませんし、私たちの自慢というのは残すだけじゃなくて、それを今活用していろいろな昔からの伝統を引き継ぎながら新しい産業にも取り組んでいるというところがあります。

少し南の方に行きますと水島工業地帯、水島コンビナート地帯があって、日本の大変大きな産業を支えています。そしてもっと南に行きますと瀬戸大橋が架かっています。瀬戸大橋はこの岡山県倉敷市と四国の坂出市の間に架かっています、今でも日本最大ですけど、世界でも有数の道路と鉄道の併用橋です。そして大変美しい橋としても知られています。瀬戸大橋がある沿岸部の地域というのは日本で最初に国立公園に指定されたところで、確か雲仙さんと霧島さんと一緒だったと思いますけれど、昭和9年に大変きれいな場所として指定をされまして、今も瀬戸内海の自然というのを皆で守っていこうということで取組をしています。

瀬戸大橋のあたりには鷺羽山というとても景色がいいところと、私も今日着ていますし、皆さんも結構着ていらっしゃいますけど、倉敷は今ジーンズのまちとしても大変有名です。児島にはジーンズストリートというのがありまして、今や40軒近くのジーンズ関連のお店が集積しています。そういう繊維産業の有名なところで、皆さんが中高生の頃に着た学生服、セーラー服は日本の約70%を児島地区でつくっています。児島のジーンズストリート、瀬戸大橋、鷺羽山のあたりに行ったことがある人。(挙手) 半分ぐらいですね。ちょっと遠いから行きにくいかもしれませんね。とってもいいところです。

もう一つ大きな地区として玉島地区というのがありまして、これは倉敷市が誇る白桃、それからマスカット・オブ・アレキサンドリア、ぶどう。お米ももちろんですけど、とても大きな農業の産地です。倉敷はこの地域の全体の中でいろいろな産業がバランスよく配置されているところですし、そしてそれに加えてこの川崎学園さん、川崎医科大学附属病院を始めとする大きな日本有数の病院がこちら、また倉敷中央病院さんなどを始めとして大変医療も充実している場所ということになります。

そしてもう一つ最近あった大きなことは、昨年7月に大変大きな豪雨災害がありました。倉敷市内でも様々な地区で冠水したり、また土砂崩れがあったり、そして特に一番大きかったのは、真備町において、テレビ等で見た方もいらっしゃるかと思いますけれど、大変大きな水害が起きました。河川がいくつも決壊しまして、そして約6,000世帯近くの家が浸水して、今もまだ約6,000人近くの方が仮設住宅で生活されています。被災された皆さんに心からお見舞い申し上げますとともに、皆さんがボランティアをしてくださったり、また学園も大変助けてくださったりされました。特に、すぐ直後に医療関係の仕事が大切になります。DMATとかJMATとして、また倉敷全体の医療チームに参加をしていただきまして、避難所を回ったりして被災者の人たちの健康をチェックしてくださったりということで、大変みんな感謝をしているところです。

そして、全国各地の皆さんから災害復興に当たりまして大変大きな支援をいただきました。義援金、またふるさと納税という形で本当に日本全国の市町村の皆さんから、テレビを見て、また友人がいるから、また倉敷に以前観光に来てよかったから復興してもらいたいということで、支援金をいただいたり、ボランティアに来てもらったり、またタオルとか水とか学用品を送ってくださったりということで、全国の皆さんから支援をいただきました。それによって私たちは今一つずつ復興を遂げてきていると思っています。まだまだ大変な状況ですけど、頑張って復興していきたいと思います。

今日また後でお話しする機会もあるかと思いますが、市としては災害に強いまちづくりということがとても大事だと思っています。特に真備は川の構造の関係で決壊をしてみました。もちろんそれだけではなく、未曾有の雨が降ってこういう状況ということになって大変残念なわけです。けれども市全体としては様々な浸水対策、それからこの川崎学園さんとも倉敷市は早くから避難場所としての協定を結ばせていただいています、確か平成23年だったかな、最近でも学園と市との間で地域に貢献をしていきたいと思いますということで協定を結んでいただいて、今、毎月ほぼ1回、倉敷市の健康福祉プラザにおきまして、川崎学園の大学の先生方が市民公開講座を市民のために行っていただいています。毎回本当に多くの市民の皆さんが来られて、これからの健康長寿社会の中で大変期待を持っているところですので、その跡を継いで支えていく皆さんたちにもとても期待しております。

私があまりしゃべってもいけないので、止めたいと思いますが、皆さんが日ごろ思っていることとか、今活動していることについてとか、倉敷のまちに対する思いというのを是非教えてもらえればと思いますので、よろしく願いいたします。最初に各大学から代表の方がお話いただけると聞いております。それでは医科大学さんの方からお願いします。

《参加者Aさん》

川崎医科大学第3学年のAと申します。本日はお忙しい中、このような会を開催していただきありがとうございます。ありふれた質問かもしれないですけど、日々関係することで、学校に行く間のところで水路のそばを通ることが多いんですよね。僕は大阪出身で水路がないというか、それに触れるような場所で育ってなかったので、水路が利用されている環境というのを初めてこちらに来て見たんですけど、道も細いですし、落ちたらどうしようとか、危険性を感じながら、あえて遠回りしてでも水路を通らない道で帰ったりとかしているんですけど、夏は臭いだったりとか、水路から落ちてケガをしたり、時には亡くなったりする方がいたりとかで、柵とかの設置がなされていないところが多いと思うんです。特に学生が多いところでは、どのように水路が使われているのか疑問がありまして、昨年の豪雨災害でも水路から水が溢れて交通に難があったりしたし、危険なものであれば、必要がないのであればなるべくなくした方がいいと思いますし、どのような必要があってというのを、学生が多い町だからすごい関心を持ったということがあります。そのあたりの説明をお願いします。

《市長》

ありがとうございます。大阪ではあんまりないんですかね？（Aさん：大阪市内には田んぼとかもないです。）

市外から来られた方にとっては、もっともな質問だと思います。それで、水路が使われているのか使われていないのかという、とても使われています。でも、このあたりは前に比べて田んぼが少なくなってきたので、使われ方が目に見えるところが少ないかなと思います。水路は何をしているのかといいますと、それぞれ田んぼに水を配給するように使われていて、実は特にこの倉敷市の地域というのは（地図を示しながら）今、松島なのでこちらへんにいます。今ここ松島でこっちは玉島でここは水島でここは児島です。名前から気づくんじゃないかと思うんですけど、ここは昔島でした。

それで、（地図上の）色が少し違いますけれど、この色が濃い緑のところはもともと山だ

ったり島だったり地面だったわけで、ここ瀬戸内海があって我々の多くが住んでいるこのちょっと色が薄いところ、ここがいわゆる江戸時代からの干拓地。上流に大きな高梁川というのがありますけれど、岡山市もそうです、旭川という大きな川がありますが、その川によって上流の土がどんどん運ばれて来て、また江戸時代後半になると干拓によって米を作っていく産業というのが大変盛んになって、ここらへんは干拓地ということになっていまして、だから島だけど今はもちろん陸地ですということになります。

それで干拓の歴史の中で、干拓をすると地面が最初は塩分が多いので、そうするとお米ができていくわけですが。塩分に強い作物っていうと一つにはイ草、もう一つが綿です。綿花。このあたりでは最初非常に多くの綿花、そしてイ草が作られていました。この中庄のあたりというのはイ草の広大な産地で、この西日本の多くの畳の畳表を作っていたと思います。九州の熊本産が今では日本全国の中で一番多いですけど。その産業の今につながるのが綿花の産業、ジーンズだったりセーラー服だったり学生服だったり倉敷紡績さんだったりということになっていまして、それでだんだん塩が抜けてきまして米が作れるようになります。そうすると綿花を作った時もそうなんですけど、そのためにこの干拓地の中に縦横無尽に水路をつけないといけないということになったわけです。

もともと大きく言うところの大きな一本の川しかありません。こっちの旭川とか足守川とか岡山の方の川もありますが、大きな川が何本かしかないんで、そこから全部水を引かないといけないので、縦横無尽に倉敷市内のほとんどのところは、この酒津から各用水ということで水路を引いていまして、実は岡山県の水路の多さというのは全国で一番多いんです。倉敷市内には今2,100キロ分の水路があります。ちなみに倉敷市の全体の面積は354平方キロメートルなので、20キロ×20キロとしてみるとその中に2,100キロの水路が走っていて、岡山市さんもそうなんですけど、岡山市さんは実はその倍近く4,000キロぐらいの水路が走っています。岡山市も岡山平野ということで広大な干拓、そして農業地帯ということになっていまして、それぞれの水路が縦横無尽に走っていて、そこから下流に向けて水路がずっと走っているところでそれぞれの田んぼの人が水を取って米を作っているということになります。それで、初めて倉敷に来た人は水路がすごく多いと思われるわけですが、水路は使われていて、昔から水というのは水利権というのがあります。水を取る人たちが決まっています。ですので、今市街地の部分は水路の手入れがまだまだできていないところも、もっとしっかりしていかないといけないと思っていますけれど、水路の蓋をすることが農業用水なのでできなかつたり、定期的に清掃したりっていうことでなかなか蓋をするのができないというのがあります。

でも皆さん言われるように事故とかがやはり起こりますので、幹線のところでありますとかまた事故が起こりやすそうなところを地元の皆さんや警察の皆さんと一緒に洗い出したり、地元の皆さんから教えていただいたりして、徐々にガードレールだったり柵だったり、若しくはそれが付けられない所は光るライトみたいなのを地面に埋め込んだりしているのが現状です。農業県ということもありまして、水路を全部埋めるわけにはいかないというのがあって、多分大阪さんはもともといろんな物資の集積地だったので田んぼは少なかったと思いますが、ただ以前はやはり田んぼもあって、でももうほとんど田んぼがなくなって市街化したので多分全て埋めてしまっていて、水の取込み口からも下流のところも水利権者がいなくなって全部廃止したという方向になっているのかなと思います。水路のことについて、事故とかがありますので、私たちも大変気にしておりますし、なるべく事前に対策をという

ことで計画的にはしているんですけど、水路全体としてはそういう状況になっておりません。

それからもう一つ水路のことについてなんですけど、さっき言ったようにほとんどの水路は酒津の東西用水組合の、酒津公園に行ったことある人いますか？（挙手）いますね。この酒津公園にある取水口というのは、今から100年前にできたもので全ての水の取込み口になっていて、さっき水利って言ったけれど、16ぐらい水門があって高梁川から水を取るんですけど、それを用水ごとに水門みたいになっていて、この2本は庄の方に行きますとかこの2本は倉敷地区の方へ行きますとか決まっているんです。そこから台風とかが来たときには台風対策の一つとして、去年の時は水路からも溢れてしまったんですけど、この水の取込み口の入口を閉めまして、事前に各水路の水を水利権者の人たちにお願いして全部抜いてもらって、台風の前には。そうしたらほとんど中身がなくなって、雨が降った分はそこにも溜めることができて洪水になる部分を少なくできるっていう効果もありまして、そういうこともしています。なので、なるべく危険を少なくしたいと思います。一方で住民の皆さんの生活とも両立していければなと思っています。よろしくお願いします。

《参加者Bさん》

川崎医療福祉大学の臨床心理学科3年のBと申します。本日は貴重な機会をありがとうございます。私は福山から通っているので、倉敷は倉敷駅の近くに美観地区もあって様々なお店もあって住みやすい暮らしやすいまちなのではないかなと感じています。

私の関心のあるテーマとして、今私は被害者支援ボランティア「かみひこうき」っていうサークルが本学にあるんですけど、その代表をさせていただいています。この「かみひこうき」というのが、犯罪被害者支援大学生ボランティア連絡会「あした彩（いろ）」というのがあって、それに所属してボランティア活動に取り組んでいます。この「あした彩」というのは、岡山県にある他の大学、環太平洋大学とか岡山商科大学とか様々な大学の大学生数百人、どんどん規模が大きくなって今数百人単位で活動しています。具体的な活動内容は、殺人事件とか交通事故によって家族であったり大切な方を亡くされたご遺族の方による遺族講演の参加とか、フォーラムやシンポジウムやそういった遺族の方との交流会を開催しています。今後ご遺族の方々の心に寄り添う支援をモットーに掲げて積極的に取り組んでいきたいと考えているんですが、今特に力を注いでいるのが、「おかやま大学生人権啓発パートナーシップ推進事業補助金」というのがありまして、それを利用した犯罪被害者支援に関わる講演会を来年の1月に本学で実施したいと考えています。

この講演会は一般市民の方々にも参加していただけるようにしたいと考えていて、この活動を通して、皆さんの人権意識の高揚ですとか、犯罪被害が実は非常に自分の身近に潜んでいることに気づいていただければ、犯罪被害に巻き込まれる方が少ない、より多くの方が安心して暮らせるまちにつなげていけるのではないかと考えています。先ほど災害に強いまちづくりっておっしゃられていたんですけど、犯罪のないまちづくりに関して少しでも私たちがよい活動で安心なまちをつくっていける手助けができればいいなと考えています。

私は将来犯罪とか司法分野に関わる専門職に就きたいなと思っています、この活動の経験を生かして少しでも岡山の役に立てる人を目指して頑張っていきたいです。よろしくお願いします。

《市長》

将来の犯罪被害者が一人でも少なくなるような職っていうのはどういう職があるんですか？（Bさん：警察関連の仕事や、少年院とか児童相談所のお仕事とかがあります。）なるほど。そういうところですね。

医療福祉大学の方にはボランティアセンターがあると伺ってしまして、もちろん医療福祉大学だけではないんですけど、学生さんたちがいろんな面でのボランティアとか地域の活動にも参加してみたいなと思ってきてる人が多いと聞いてまして、とてもすごいなと思っています。それで、倉敷市でも犯罪被害者の方の支援ということでは、国全体も取り組んでいくという法律もできまして、条例をつくって総合相談窓口を設けて、ただ窓口を設けて待っているだけではいけないので、いろんなネットワークを通じて皆さんが言われるような会に参加したり、またいろんな相談の窓口があるんですけど、よく聞いてみたら犯罪被害者の方で気持ちの面だったり生活の面で困っていたりするので、必要なサービスにつなげていくように取り運んだりということを、市としてはしています。

今ボランティアの話が出たので、皆さんボランティアをされている方も多いと思います。日ごろ勉強で忙しいと思うんですけど、何か地域の人たちが活動していることに一緒にやってみようかなと思ったら、是非声をかけてもらいたいなあと思うんです。地域の方たちは一生懸命いろんな活動をされています。例えばこの地域でも、皆さん見たことあるかもしれないですけど、地域の子どもたちのためにオレンジ色のエプロンをかけたお母さんたちが、交通安全母の会っていうんですけど、通学路とかに立って、子どもたちが安全に学校に行けるように声をかけてくれたりとか、帰りの時間、今度は黄緑色のジャンパーを着た人たちとか帽子を被ったおじさんたちが、旗を持って通学路とかに立って、安全に家に帰って行くよう声をかけてくれたりっていうことをしています。以前も学生の皆さんたちもパトロール活動をしてくださっていると伺っておりますけれど、何か自分が興味を持ったりした時に、是非そういう地域の人に声をかけてもらいたいなというのが私の希望です。

地域の人たちから、「川大の学生さんたちは勉強とかで忙しいからなかなか話す機会がないんだよ」とよく言われていますし、逆に学生の皆さんたちもどうしたら地域の人たちとお話できるのかなと思っていると聞きますので、何か地域の人たちが取り組んでいるようなことに行き合ったりした時に「どういうことをされているんですか？」と聞いたらきっと喜んで話してくれると思うので、そうすると地域が成り立っていくためにはこういうことが必要なんだなということがまた分かっていったり、もしそこで興味があって何回か行き合ったりすれば、「自分たちも一緒に手伝ってみようかと思うんですけどどうですか？」と言ったら、絶対ものすごく喜んでくれると思いますし、ここは倉敷地区の方ですけど、例えば倉敷芸術科学大学のある水島の地区の人たちも、芸科大の学生さんたちがいろんな活動に参加してくれるのをとっても喜んでるので、だからいろんな分野あると思いますけれど、皆さんが、「ちょっとこれ何か？」と思ったときに声をかけてみたりしてもらえるとありがたいし、それがきっと皆さんのこれからの人生の中でひとつの勉強っていうものなんですけど、社会の成り立ちというのを知る大きなきっかけになるんじゃないかと思います。

今の犯罪被害者の方の支援、とても大切なことだと思います。また講演会も、市でできることがあったらPRとかしますし、頑張ってもらいたいと思います。ありがとうございます。

《参加者Cさん》

川崎医療短期大学2年の看護科のCと申します。よろしくお願いします。

今年の4月に東京・池袋で発生した高齢者ドライバーによる事故の影響で、高齢者の方が免許返納について関心を高めたように思います。倉敷市では免許を返納すると、「おかやま愛カード」が交付されるなどのシステムがありますが、まだまだ高齢者の方の負担は大きいと思います。また、もう一つの免許返納を支えるシステムに、免許センターに開設されている相談窓口があります。相談窓口をどのような人が担当されているのかは認識できていませんが、鳥取県などでは、免許センターに看護師を配置して、認知機能の低下の疑いがある方に、看護師の立場から医療機関の受診と免許返納を促す取組をしていることを知りました。

私は将来看護師を目指しており、警察の方と連携して病院外の人たちの健康や安全を守るのなら、看護師の活動の場を広げてもいいのではないかと感じています。

以上のことから高齢者の方にどのような対応をすれば、高齢者の方が安心・納得した免許返納が可能になるかをお尋ねしたいです。

《市長》

ありがとうございました。最近の社会の話題の中で、とても大切なことを言ってもらいました。

今、池袋の事件以降で、免許返納の方が増えています。免許自体は警察の担当なんですけど、市も一緒になって必要な方、心配な方については返納ができると、そうすると岡山県内だと、「おかやま愛カード」がもらえて、いろいろな公共機関の運賃が安くなったり、ちょっとJRは料金体系が違うんですけど、例えば井原鉄道でも、うちの水島臨海鉄道でも、また、バスとかでも割引があったり、それから飲食店でも、「おかやま愛カード」を持っていると飲食が5%とか10%引きになるところが結構、何百店舗ぐらい今あるんじゃないかと思います。そういうのをPRしていますけれど、今、高齢化社会になってきているので、本当に危ない方については免許を返納していただくというのが、自分のためにも家族のためにも、もちろん被害に遭ってしまう方が少なくなるためにも、とても大事なことだと思います。

今、Cさんが言われたように、私たちも県警察と対話する時もありますので、もっと医療的な観点を持ったようなアドバイスをしてもらえるようにしたらいいなということを書いてみようかなと思いますし、いろんな交通安全教室とかがあると認知機能のテストみたいなのがあって、そういうのをして自分は、信号が変わった時にそれを見つけれられる機能が落ちてきたので、免許を返したほうがいいかなと気付く人もいらっしゃるということを書いていますので、いろんな機会を通じて高齢ドライバーになってくると危ないところも多いというのをPRと言いますか、普及していきたいと思います。

一方で、免許を返すと移動が大変だということがあると思います。先ほど言ったような割引もあるんですけど、それだけでは足りないと思いますので、今、倉敷市ではコミュニティタクシーという制度がありまして、地域の人たちがある程度の定期的な、ここにタクシーを走らせたいという経路があったら、そこに対して住民の皆さんが使われる時に、市からタクシー会社に対して補助金を出すという仕組みもあります。今、市内全体で大きな団地が9か所ぐらい使われているんですけど、そういうものをもっと増やしていったらいいなという

ないと思うのと、あとは団地全体ではなくて、例えば障がいのある方とか、なかなか病院に行くのに足が不自由な方とかっていう時に福祉タクシーというのがありまして、そういう制度に対して市も補助金を出したりということもしています。いろいろなものを組み合わせ、免許を返納されても住んでいきやすいような社会にしないといけないなと思っていますけれど、まだまだ免許が無いとなかなか不便だということも事実だと思いますので、両方もしっかりPRをするのが大事かなと思っています。いろんなPRをしてよく知ってもらう、それから自分が、家族が危険にならないようにというのを理解してもらうことも進めたいと思います。どうもありがとうございます。

それでは今から、自由に手を挙げてお話をしてもらったらと思います。お願いします。

《参加者Dさん》

医療福祉大学医療福祉学科4年生のDといいます。僕は「倉敷トワイライトホーム」という活動に携わっていて、当大学では「子ども支援サークルにっこにこ」という名前で代表をやらせてもらっています。この「子ども支援サークルにっこにこ」、「倉敷トワイライトホーム」というところでは、放課後の子どもの居場所づくりということで、様々な理由で夜を一人で過ごしている子どもや、何かトラブルがあったりとかして学校に行きづらいとか、子どもの貧困、相対的貧困と呼ばれる子どもたちで、例えば生活保護とかを利用している子どもじゃなくて、そういった制度からあふれてしまっている生活困窮の家庭のお子さんが多くて、そういった子どもたちの居場所づくりをしていまして、現在5家庭8名の子どもさんを預らせてもらっています。主な活動内容としては、大学生がごはんを作って一緒に食べたりだとか、子どもたちがやりたい事を一緒にやったりとか、大学生が子どもに寄り添うという形で、子どもの主体性を育てるとか、いろんな目的があるんですけど、そういったことをしています。

日々活動している中で思うことは、倉敷市にも困っている子どもさんとかご家庭がたくさんあって、この「倉敷トワイライトホーム」も何名ものご家庭の方が利用したいと言ってくださるんですけど、「倉敷トワイライトホーム」は学童保育みたいに大勢の子供を相手にするのではなくて、子どもと学生1対1で、あなたの時間だよ、あなたの居場所だよというのを大事にしているので、どうしても大人数の相手ができなくて、利用を断ってしまうケースが多々ありまして、そういったところで自分たちのような子どもの居場所が増えたらいいなと思っています。

今年、子どもの貧困対策推進法というものが変わって、3つのポイントとして、将来の貧困の連鎖を断ち切るだけでなく、今、目の前にいる子どもたちの現状の改善というのと、子どもの貧困対策の推進だけでなく、子どもの貧困の解消の追加というのもありまして、あと、子どもの貧困対策計画の策定というのが市町村の努力義務になったと思うんですけど、倉敷市として、どのような取組を考えているのかお伺いしたいと思っています。この「倉敷トワイライトホーム」は倉敷市の皆さんと一緒に作り上げてきている活動なので、これからもずっと続けていきたいものでありますし、僕自身も来年からは倉敷市で児童分野で福祉の仕事をしていただくので、目標じゃないけど、一緒に頑張っていけたらいいなと思っていますので、是非お考えを聞きたいです。

《市長》

はい、Dさん、ありがとうございます。子どもさんのために活動をずっとしていただいているということで、ありがとうございます。

今、お話にありましたように、子どもの貧困というのは今、社会的な大きな課題の一つになっていると思います。それに対する対策としまして、国も法律の改正をして、これまでは国と協力して実施しますということだったんですけど、今後、市町村に対しても、計画を作るよう努力をしていきたいと思いますというのが初めて示されたということになりました。市としても、子どもさんのいろいろな計画も持っているんですけど、まずは、「子ども未来プラン」というのがありまして、その中に今後改正の時に、これまでは子どもの貧困のことについては記述が大きくはなかったんですけど、計画の中にも位置付けをして、努力義務なんですけど、取り組んでいきたいと思っています。計画に書くというだけではいけませんし、書いて市が取組をしていくということを大きく知らしめるということは一つの方法だとは思いますが、それに加えて、各家庭の状況というのがあります。もちろん生活保護の家庭の方もいらっしゃる、そうじゃなくギリギリの家庭の子どもさんもいらっしゃる、また、親御さんがずっと遅くまで働いていて、一人でいないといけない子どもさんもたくさんいらっしゃる、トワイライトホームさんみたいな支援であったり、また、親御さんの状況というか、家庭環境ということの一つひとつできる場所で改善できるものがあれば、その相談に乗っていく。例えば年収が低くて子どもさんのご飯の方にお金を回すところが少ない、若しくは子どもと対応する時間が無いとか、そういうことによって、あまりそれが進んで本当にネグレクトとか虐待になっていくといけませんので、そういうふうにならないように、その前の段階から相談に乗ったり、若しくは、例えば子どもさんの、小さい頃だったら何か月検診とか何歳検診とかあるんですけど、そういう時に、例えば、「栄養が足りてないな」とか、「体にあざがあるな」とか、そういうのを私たちの保健師とか医療職が気付いて、そして、必要な支援につなげるということも今しているんですけど、もっと強化しないといけないと思っています。この貧困のことについては、一つの施策だけで解決していくものではないと思いますので、みんなで一緒に取組をすることが大事だと思いますし、市としましても子どもの貧困のことについては市議会等でも質問もありまして、やはり計画にも位置付けて取組をしていかないといけないと今、なっています。これからは皆さんのいろんな状況を伺いながら、一緒に取組をしたいなと思っています。よろしくお願ひします。

《参加者Eさん》

川崎医大2年のEと言います。私は静岡県の出身なんですけど、先ほど市長さんもおっしゃられたように、倉敷市には倉敷中央病院とこちらの川崎医大附属病院、2つの三次救急指定病院があると思うんですけど、また同時に人口当たりの医師数も全国平均を大きく上回っており、私の出身の静岡県よりもとても多く、すごい医療資源が豊富な市だと感じております。また同時に、子どもに対する医療助成金をつくられるなど、子育てに力を入れている点もすごく感じております。それらとは反対に10年後頃にピークを迎えるであろう高齢者の医療介護だとか、医療福祉の需要に対してはどのような制度・対策を考えていらっしゃるのかを伺いたいです。

《市長》

市の医療助成制度のこととかも勉強してもらってありがとうございます。倉敷市にはこ

ちらの医科大学さん、また中央病院さんもありますし、大きな二つの病院があるということもあって、いろんなところからお医者さんが集まってきてくださっているというのがあると思います。

その中で全国平均よりも倉敷市の中だけを見れば、お医者さんの割合が多いというのは今言われたとおりなんですけど、私が非常に重要だと思いますのは、この川大さんと中央病院、また倉敷市内の病院というのは、倉敷市民だけを診察して健康を守っているわけではなくて、私たちは高梁川流域というんですけど、岡山県の西側地域全部、倉敷から総社、高梁、新見まで、そして、井原、笠岡まで、岡山県内の西側の方たちはこの大きな二つの病院に多くの方がかかっていますし、頼りにしているということがあると思います。

ですので、もちろん倉敷の人口も多いんですけど、倉敷だけ見るとちょっと多いように思えますが、岡山県内の西部地域の医療圏全体を診ているということなので、決して多いわけではないと思いますし、みんなそれぞれ、市にも市民病院とかもあるんですけど、お医者さんをお願いしたり、日ごろから連携よくしているというのがあると思います。

それで、私たちの地域というのは、非常に医療職と、それから介護など健康に関するもの、そこから住民活動もそうなんですけど、地域の健康に関する役割を担っている愛育委員さんとか民生委員さんとかいろんな委員がいるんですけど、そういう人たちとの連携がとてもうまくとれているというのが、倉敷市の一つ、大きくいいところではないかと思います。

もちろん、これからの高齢社会の中では、医療職をはじめとして多くの人材が必要になってくるわけですけど、お医者さんだけでは当然対応できない、看護職や薬剤師の皆さん、介護福祉士の方、療法士の方はじめ多くの人材が必要です。倉敷市の場合は倉敷医師会、また全体の連合医師会というのもありまして、そういうところと各病院との連携が非常によくできているので、私の大きな方針としても、子育てのこと、それから健康長寿のまちづくりということに非常に力を入れていますので、そのあたり皆さん一生懸命頑張ってくれていると思います。

健康長寿という意味では、医療費の助成のところもあるんですけど、もう一つ大きいのはなるべく病気にならないように、日ごろからみんなが健康にいられるように、適切に検診とかを受けて、必要な病院には行って、健康に長生きしてもらおうということが非常に大事なので、そこに今力を入れています。

もちろん、すでに病気に罹っている方は病院で適切な治療をしてしっかり治してもらいんですけど、なるべくそうならないように、特に生活習慣病とか、糖尿病とかになると国全体の医療費のことにも関わってくるので、国もちゃんと保っていかないといけないと思っています。だから、みんなが健康でいるためにどうすればいいか、検診を受ける、それからもう一つは地域で高齢者の皆さんたちが元気にいろんな役割を持って取り組み、活動をすることがすごく大事だっているところをみんなよく考えてくださっています。それでさっきの街角におじさんたちが出て、子どもの登下校を見守ってくれたりというのとか、地域でふれあいサロンっていうのを倉敷市内でも300か所くらいだったかな、してまして、それぞれの地域の人たちが、15人とか20人とかで、週に一回とか月に二回とか集まってお茶を飲んでお話をしたりして、とにかくそこまで出て行って地域の人たちと触れ合うと、だから一人だけでずっといたら塞ぎがちになって病気にもなってしまうし足も悪くなるので、そうじゃなくて、まずはそこまで行ってみましょう、それでいろいろ話してみたら、「これだったら自分も一緒にできる活動があるのかな」ということで、一緒に旗を持って子どもさ

んの見守りをしてくれたり、若しくは、囲碁のサークルを公民館でやってるからそれに行こうかとか、そういうのを全般的に取り組んでいくというのが、健康長寿社会には大事なことだと思っています。

市でもいろいろな公民館のサークルや教室とかで趣味のサークルとか講座が多いんですけど、最近では健康に関することにも力を入れています。皆さん大きく関わっていく分野ではないかと思しますので、私たちはそういう面に力を入れて、市民全員が健康なまちに向けて頑張りたいなと思っています。

《参加者Fさん》

川崎医療福祉大学医療福祉学科2年のFです。私は倉敷に長いこと住んでいますけど、レンコンがすごく有名なところで、(市長：連島のレンコンですね。)はい、そのとおりです。ありがとうございます。

私が興味を持っている福祉の分野が障がい者の就労支援になります。どうしてかといいますと、私自身が当事者でありまして、発達障がいがあります。そして就労継続支援A型事業所を大学に入る前の3年間利用しておりました。なので、今大学2年生なんですけど、他の同級生よりは少し年が上になっております。A型事業所を利用している時期に、倉敷やほかの地域でもそうなんですけど、大量解雇の問題がありました。それを見て私はとてもつらい気持ちになって、その利用していた事業所にも他の解雇された方が来て、話を聞いたりして本当にいろいろ考えさせられています。それがきっかけになって、福祉職に就く上で取り組みたい課題が就労支援となりました。

今後、就労支援や障がい者の支援において重要だと考えているのが、比較的軽度の障がいがある人の支援です。どうしてかという、軽度の障がいだと障がい支援区分が軽度だったり、手帳がもらえないという方もいらっしゃると思うんですが、そういう方への支援は制度上充実していないといいますか、ちょっと不十分な部分もあると思うので、それをこれから進めていただきたく思います。それを解決することによって、そういった方々が能力を活かした就労やそれにつながるスキルアップのための進学や資格の取得をすることで、その方が支える側になる可能性も十分あると思うので。そういったことに関する意見などを聞かせていただけたらと思います。

《市長》

はい、ありがとうございました。障がいのある方々への支援ということは、社会の中で大変大切な施策です。市でも障がいのある方に対して、今言われたような支援事業所でありますとか、またこの前の大きな事件のときには、市全体が、もちろん我々の指導もそうですが、事業者の方が就労支援事業所をしていることの意味をしっかりと持ってやっていただかないといけないと思います。国の支援の制度というの、それ以来変えてもらったところもありますので、事業所に作業に来て、自分が社会で働いていこうという思いを実現できるように、それを支援するためにあるわけですから、まず事業所にしっかりとした指導を行うべく、あの事件が起きてからすぐ、事業所を監督する部署をつくりました。もちろんちゃんとやっていただいているところもたくさんあるわけですけど、今回のようなことがあったので、事業者に対する指導というものを厳しくしていけないといけないということで、それをやっています。

指導する中には、ちゃんと経営が成り立っていないと、そこで就労されている方に対する賃金の支払いや支援というものもできませんので、経営がちゃんとできているかということも、その事業所に対して中に入って見て、経営が難しいところについては相談に乗るといことも今やっています。事業所の体質をしっかりとしてもらおうということも必要だと思いますし、もちろん、事業者になるときにちゃんとできるところなのかというのをしっかりと見ないといけないと思っています。

それから、企業の方とよくお話するときもあるんですけど、今言われた軽度の方に対して、水島のいろいろな企業さんも含めて就労ということについてとても期待を持っています。いろいろな障がいの方がいらっしゃるわけですけど、ある意味、一つの仕事を几帳面に一生懸命にされる方が多いわけですし、そういう皆さんたちが働いてくれて、部品の製造において悪い品質の率が低くなり、しっかりとできているということで表彰を受けている会社もある。そういう会社の皆さんたちは、軽度の障がいのある方や発達障がいがある方などについて、積極的に働いてもらいたいという思いがあります。そういう企業の皆さんがいらっしゃるんだということを、実際に倉敷市でパンフレットなどを作っているような作業所とかにもお渡しして皆さんにPRを図ったり、若しくは、そういう人たちを表彰したりして、PRすることなども大事だと思っています。今は人材不足というか、どこの企業でも、それからどういう仕事でもたくさんありますので、障がいのある方・ない方はじめとして、若い方・高齢の方まで。

ですから、さっきの高齢者の方の話にもつながるんですけど、みんなが働いてまちを守ってもらえるようにするっていうのがすごく大事だと思いますので、これからも障がい者の方の雇用のこと、就労のことについては、市もしっかりと力を入れていきたいと思っています。どうもありがとうございました。

《参加者Gさん》

医療福祉大学医療福祉学科3年のGです。自分がちょっと興味を持っているのは子育てのことについてです。このあいだ国が保育所の無償化のことを検討しているというニュースを見て、それはいいことだなと思ったんですけど、うちには二人姉がいて、上の姉が一人子どもを出産して、姪っ子がいるんです。姉もそろそろ仕事に復帰しないとけないんですけど、保育所の受入れができない状況が続いていて、仕事に戻ろうと思っても戻れない状況が続いています。自分としても、保育士さんの人手不足っていうのもあるし、保育所の数の問題というのもあるって、これは考えないとけないのかなと思っています。

このあいだ他の自治体に行って役所の人と会話したときに、そこの自治体では完全に保育費も払います、住むところも提供しますという感じで完全に受入れ態勢ができたんですけども、倉敷市として今、子育て問題としてやっていること、また、今後やってみたいことがあったらお話を聞いてみたいです。

《市長》

Gさん、ありがとうございます。ちなみにお姉さんは倉敷市民ですか。(Gさん：いえ岡山市です。) そうですね。うちもまだ待機児童はいるんですが、今140人くらいです。

この10月1日から、全国的に幼児教育保育の無償化が始まるというのが分かりましたが、大体平成26、7年ごろからいろんな取組を前もってしておかないと、すぐに受入れの

態勢が取れないので、保育園の定員を増やしてきておりました。定員を増やすためには、今言われたように、保育士さんの数を確保できないと、一人当たりの見れる子どもさんの数が決まっているので、だから建物を建てればいいだけじゃなくて、保育士さんを雇ったり、でも保育士さんの仕事もすごく大変なので、それだけじゃなくて、例えば保育士さんの事務の仕事とか、まわりの仕事とかをしてくれる人を雇う施策をしたり、だんだん保育士さんの数を確保して定員が増えるようにこの間やってきました。

来年4月に私の公約で待機児童ゼロというのを掲げていて、今それに向けて頑張っています。今年4月に140人くらいの待機児童だったんですが、でもこの10月に無償化で入りたい人が増えるので、来年4月までに大体300人かそれ以上くらいまでは受入れができるように、今年と比べて、するということで、ずっと取り組んできました。その時に、さっき言いましたことと、それから特に保育士さんの確保ということでは、皆さんの中にも幼児教育とか保育の資格を取られる方もいらっしゃるかと思いますが、やっぱり資格を取って別の仕事に就かれる、若しくは資格を取って一回保育園に就職して、何年か働いたんだけど、辞めてしまわれて、復職してないという人がたくさんいらっしゃるの、そういう方たちに戻ってきてもらえるような取組を結構しています。

戻ってくるといってもブランクがあって、すぐには自信ないという人もいらっしゃるの、試しに働いてみて、自分でやれると思ったら復帰しようという実地研修というのもやっていますし、また実際に就職した人が辞めてしまったら、これまた保育士さんが減ってしまうので、入られてからのいろんな研修会を充実してやるようにしています。一つの園だけじゃなくて、倉敷市内の公立も私立も一緒になっての研修会をしたりして、悩みを抱えないでみんなでも対応していけるようにということを今しています。

それから大事なことが、こちらの川崎学園さんをお願いしまして、昨年4月、皆さんのグラウンドのすぐのところにあると思いますが、川崎学園の認定こども園ができて、もちろん学園の関係者の方たちもそうですが、地域の皆さんが大変期待を持って受け入れられていますので、地域の役割を川崎学園が大きく担っていただいている部分もあります。

(Gさん)お姉さんの件が、育休退園の対象だったのかどうか分かりませんが、倉敷市も施設の整備がなかなかできてなくて、今、0～2歳児は育休退園しなければならない状況になっていたんですが、ここ4、5年かけてずっとやってきたので、来年4月からは育休退園しなくてずっと預けていられるというふうにできるようになりました。それも発表して、もうすぐ受付くらいの時期になっていますので、保護者の方々が喜んでくださっているの、そういうこともしっかりPRしたいと思います。

保育園や保育士の方に対するいろんな助成等、制度的なものを国と一緒にやっていきますけど、箱物だけじゃなくて中身も充実、それからその後のフォローというのもすごく大事だと思っています。

《参加者Hさん》

川崎医科大学1年のHと言います。私は今年27歳なんですが、東京、千葉、東京で6年、9年、11年とそれぞれ過ごしてきました、親戚も東日本に多くて、西日本には初めて来たんですが、不安な気持ちもあり、なぜこの倉敷市に来たのかは割愛させていただくんですが、伊東さんは東京大学出られて、様々なところへ行かれたと思うんですが、なぜこの倉敷市に来て数年間お仕事されて、その後11年ほど前ですかね、倉敷市長になられたのか。なぜこ

の倉敷市を選ばれたのかというのが気になりまして。僕も6年間、医大生としていたので、いいところを吸収して、学んで、いろんな方にお知らせしたいなと思います。

《市長》

大学を出てからは、総務省という役所があるのですがそこに入って、入ったときは郵政省という役所だったんですよ。郵政省というのは郵便局とか携帯とかITとかの担当をしているところで、そこから倉敷に来る前に別の地域として、栃木県の日光東照宮がある所の日光郵便局の局長を1年間したり、それから海外の方に国の仕事の関係で何度か行ったりしたんですが、あるとき郵政省と自治省と総務庁が合併しまして総務省になって、人事異動で「伊東さん4月から倉敷市に出向です。」と言われたんです。

国と県とか自治体というのはいろんな人事異動があって、その中で地方の自治体から要請があったらなるべくそれに合う人を出すというのがありまして、ちょうど私がその条件に合致したようで、役所の人事課長から呼ばれて、大体2週間くらい前に内示があるんですが言われて、ここにやって来ました。

その時は総務局長として仕事をして、そこから三役の一環の収入役という仕事をして、そこから大体4年くらいで東京の総務省に戻っていたのですが、地域の皆さんたちが、その当時の倉敷市の状況はなかなか厳しいものがあって、観光客がだんだん減ったりとか、リーマンショックもあって経済も難しい状況の中で、「是非市長選に出てもらいたい」という話になって、署名を集められたんです。それでその署名を東京の総務省まで持ってきてくれて、「これだけの人たちが市長選挙に出てもらいたいと言っているので考えてください」と言われました。

私は当時国家公務員でインターネットの日本の代表として国際会議に行くという仕事をしていたので、それも重要だと思っていたのですがごく悩みました。選挙に出るとしたら国家公務員を辞めないといけないので戻って来られません。その時に私が最終的に思ったのは、自分が何で倉敷の地域の人たちに選挙に出てと言われて、自分が何でここまで悩むのかと思ったんですよ。私が倉敷のまちのことを、単に出向してきて3年いればいいやと思っているまちだと思っていたのか、それとも、このまちというのはものすごい可能性があって、いいまちで、これから伸びていくまちだと思っているけど、なかなかその当時はそうっていなかったんで、このままじゃいけないという住民の皆さんの思いを共有していたので、それで悩みに悩んで、何で自分がこんなに悩むのかと思って、倉敷のことをとにかく好きだと思っていて、みんなと一緒に何とかしたいと思っているからだと自分としては結論が出て、今に至っています。

多くの人からよく決断したねと言われるのですが、やっぱり自分が今目の前に思っていることについて、自分が今大事だと思っていること、これをしなきゃいけないと思っていることに、全力で自分としてはいつも取り組んでいるつもりなので、それが今の私がある理由かなと思います。

《終》